

アモス書 第6章 1-7節

テモテ書一 第6章 11-19節

ルカによる福音書 第16章 19-31節

一昨日の9月23日（金・休）に、聖アンデレ教会を会場にして、『北関東教区との宣教協働・教区再編（新教区設立）に関する説明懇談会』がありました。教区会のように信徒・教役者が集まり、両教区の宣教協働の現状について報告がありました。単なる統廃合でも法人合併でもなく、より豊かな主の宣教の働きにつながりますように、この大きな歩みを支えていきたいと思えます。わたしたちの教会では、昨日24日（土）、2012年からの逝去された方々を覚えて、2022年度の逝去者記念聖餐式を行いました。昨年と同じく公禱の礼拝とは致しませんでした。ご出席くださった教会の方々と一緒に祈りをささげるができました。

今日の福音書は、新共同訳でも新しい訳でも「金持ちとラザロ」と小見出しがある、有名なイエス様のたとえ物語です。注解書などによっては、「ある金持ちと貧しきラザロ」と内容が推測できるような小見出しを付けている場合もあります。

物語全体の基本構造は単純です。「やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた」（16:22-23）と最初にある通り、生きていた間に贅沢に暮らしていたある金持ちが死んで陰府（いわゆる地獄）に行き、生きていた間は貧しく苦しんでいたラザロは、死んでアブラハムのいる天の宴席（いわゆる天国）に行ったというものです。

このような明白な地上での報いと天上での報いの逆転は、ルカ福音書の特徴です。すでにマリアの賛歌で、「**飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます**」とありました（ルカ1:53）。イエス様の母となるマリアは、自分がこれから産む子によって、そのような社会が実現することを予感して、そう述べたと物語は告げます。ここではそのイエス様が、たとえを通して教えとしてそのことを述べています。

このイエス様のたとえの聞き手は誰でしょうか。物語の流れとしては、16章1節でイエス様は「**弟子たちにも次のように言われた**」と、「不正な管理人のたとえ」を語っています（ルカ16:1-13・先週の福音書です）。しかし、16章14節では、「**金に執着するファリサイ派の人々が、この一部始終を聞いて、イエスをあざ笑った**」とありますので、イエス様のたとえ話をファリサイ派の人々も聞いていたようです。それゆえ、イエス様はそのあと「律法

と神の国」について教えを語ります（ルカ 16：14-18）。場面はそのまま続いていますので、このたとえの聞き手は、イエス様の弟子たちと敵対者であるファリサイ派の人々ということになります。

先に触れました、「**金に執着するファリサイ派の人々**」という表現ですが、これは必ずしも史実とは言えません。そのような人がファリサイ派に一人もいなかったとは断言できませんが、ファリサイ派は、律法を厳格に守りながら、つつましい生活をしてきた人々です。どちらかというところ清貧に近い人々であったと思います。そもそも律法を厳格に守っていれば、地上で著しく豊かになることはないのです。

それでは、ルカ福音書において、なぜファリサイ派がこのような描き方をされているのでしょうか。おそらく、イエス様を信じる教会という集いは、新しいイスラエルとして律法を超える歩みを実現する、その趣旨に基づいてこのような特徴づけがなされたのだと思います。いずれにしても、物語世界においては、「**金に執着するファリサイ派の人々**」と特徴づけられたファリサイ派の人たちにとって、このイエス様のたとえは、強烈な皮肉です。

他方で、同様にたとえを聞いている弟子たちは、ラザロほど貧しくはありませんが、どちらかといえば貧しい方であったと思います。イエス様の時代、極端に豊かな人は少数であり、また中流という状態がありません。弟子たちは、それぞれ定職についていたと思いますが、その時も生活はぎりぎりであったと思います。そして、イエス様の弟子になるにあたり、その職も捨ててきています。それゆえ、このたとえ話を聞いている時点は、経済的な安定はありません。その意味では、イエス様の天上での逆転勝利の宣言は、心強く響いたと思います。

たとえ物語をもう少し見ますと、金持ちは、「**そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』**」（16:24）と天上のアブラハムに訴えます。自分自身アブラハムの子孫として呼びかけており、また地上で自分より低い立場であったラザロに対して、相変わらず上から視線の発言です。しかし、その願いは受け入れられませんでした。その理由をアブラハムが答えます。

「**アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。そればかりか、わたしたちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることもできない。』**」（16:25-26）です。すでに死後の歩みが決定しているために、金持ちの願いはかなえられないのです。

たとえ物語がここで終わっていただければ、地上の歩みは最後の審判にかかわるというだけになるのですが、物語はそれでは終わりません。金持ちは、自分

に起きた結果は諦めるのですが、自分の5人兄弟が自分と同じにならないように願うからです。「金持ちは言った。『父よ、ではお願いです。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』」（16:27-28）と彼はアブラハムに願うのです。

しかし、アブラハムの答えは、彼らには「お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい」というものでした。それでも、その男は「死んだ者（ラザロ）が行ってやれば悔い改めるでしょう」（16:30）と、もう一度ラザロの派遣をお願いします。しかし、アブラハムは、「もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう」（16:31）と答え、物語は終わります。

さて、このたとえ物語は、現代のわたしたちに何を語りかけているのでしょうか。第一にこの地上における豊かさと貧しさとの逆転が、イエス様を信じることによって、天上において起こるということです。そして、その逆転は、『聖書（旧約）』にある信仰と豊かさに関する問いの答えとなっていることがわかります。つまり、地上において経済的に豊かであることは、信仰的に豊かであることの証にならないということです。また、地上において信仰的に豊かであっても、経済的に豊かになることはなかった歩み、そのような歩みを主なる神様はしっかりと見ておられるということです。もちろん、ここは地上における富所有の否定を語っているわけではなりません。主なる神様が求める世界は、信仰的にも経済的にも人々が安定している世界であるからです。逆転のために、「悔い改め」について語っていることが重要です。

「悔い改めること」、これもルカ福音書全体のテーマになっている事柄です。『聖書（旧約）』においてそれは、主なる神様に「立ち返ること」ですが、教会においてそれは、イエス様を通して主なる神様を信じることです。このたとえでは、悔い改めが、律法ということ結び付けられています。律法は単に廃棄されたのではなく、イエス様の愛に基づいてそれがより具体化されることが求められています。ただし、この物語では、「もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう」（ルカ 16:31）とある通り、陰府に下ってからはどうしても遅い、だから生きている間にそうしなさいと語っています。

イエス様を信じて悔い改めることは大切ですが、悔い改めれば、何もしないですべて救いへとつながる、そのような安易な信仰を語っているのではありません。そもそも『聖書（律法）』自体が、貧富の差を生み出さないことが前提となっていました。その『聖書（律法）』をイエス様の愛に基づいて解釈し、実行することが大切なのです。ただし、そのことも逆転への絶対条件ではないことをもルカ福音書は示します。律法の具体化に失敗したとしても、

あるいはそれができなかつたとしても、悔い改めた信仰を主なる神様が受け入れてくださることを示しているからです。その例が、人生の最後の直前にイエス様の隣で十字架につけられた悔い改めた人です（ルカ 23：42-43）。

本日のイエス様のたとえ物語は、信仰と地上での豊さが、救いにおいて逆転することをはじめとして、いろいろな意味で関係していることを示しています。そして、そうであるがゆえに、この地上において、もし豊かであるならば、その富がどうしてもたらされ、何のためにあるかを考えることへと、たとえを読む人を導いています。また、たとえこの地上において貧しかったとしても、そしてそのことが即解決しなかつたとしても、主なる神様が必ず見ていることを示しています。

最後に旧約日課に触れますが、本日の「アモス書」の個所は、外面でしか主なる神様を信仰せず、貧しい人々を顧みずに豊かさを享受していた人々への、厳しい批判が描かれています。貧富の差の問題を顧みない人々に対する厳しい批判です。すでにイエス様の登場するはるか前から貧富の差とは、神様を信じるにあたって大きな問題であったのです。

経済的な豊かさについての様々な要素や概念は、イエス様の時代とわたしたちの現代とは異なります。しかし、人類の歴史を考えると、それは経済的な豊かさを追い求める歴史であったとも考えることができます。そして同時にそれによって生じてきた貧富の差をどのように解決するかという歴史でもあったと思います。大ざっぱな見方ですが、そのようにして歴史をみると、すでに主なる神様が与えた律法の中で、貧富の差をできる限り少なくすることが命じられていることが分かります。そしてアモスをはじめとする預言者たちも警告し続けていました。しかし、イエス様の時代でも解決しませんでした。教会が誕生して2000年の時を経ましたが、まだ解決しませんでした。今もこの問題は解決しないまま続いているのです。

教会は、地上の富ではなく、天上の富、天に救いがあることを使信として語ります。昨日逝去者の記念聖餐式を行ったように、天に本当の命があることを信じて、地上の命を歩みます。そして、その希望からこの地上に平和が訪れることを望むことと同じように、この世界に経済的貧しさがなくなること望むことが大切です。望むといっても、全世界の教会が総力を挙げても、世界の経済構造を変えるような力があるわけではありません。そもそも、イエス様の活動は、経済格差をなくすための社会変革活動ではありませんでした。それは初代の教会も同じです。しかし、イエス様は、祈り、学び、あるいは具体的な交わりを通して、経済的な貧しさを感じさせない交わりを具体化しました。教会は同じです。復活のイエス様がともにおられる天上の教会と同じ教会を、地上において具体化することはできません。しかし、それを感じさせるような交わりを、具体化することが、教会の使命です。わたしたちも、その教会の一つとして、これからも歩みたいと思います。